

小山先生と四年月組

二十七回生 熊谷 克彦

昭和二十八年の秋、私は北海道の炭鉱町から、千里第二小学校に転校してきました。その時の四年月組担任が小山健一先生でした。先生はまだ、二十八歳。スマートな気鋭の文学青年でした。そして、卒業までの二年半を担任して頂き、成長への入口に差し掛かっていた、私たちそれぞれに大きな影響を与えて下さいました。

特に国語の時間に、宮沢賢治や大関松三郎など多くの小説や詩を紹介して、言葉の持つ意味と文章を理解する力を教えて頂きました。

スポーツの面でも熱心に指導して頂きました。軟式野球では、我々月組は三年間通して、学年で一番強く、上級生のクラスに勝つこともありました。

また、夏休みの浜甲子園での水泳実習では、北国育ちで泳げなかった私を個別指導して下さい、その後、泳げるようになるきっかけを作って頂きました。

卒業の時の寄せ書き帳に頂いた、先生の言葉。

「君とお母さんは、離すことが出来ない程、印象に残っている。満州の生活、引揚げの話や、お母さんのソールラン節。君は何か大きな仕事をやり遂げてくれると思う。北国の子はねばり強いというから」
この言葉はその後の私の支えとなりました。

あれから五十年近く経って、月組の同窓会で、小山先生と再会しました。

そして、戦争の悲惨さを描いた「火垂の墓」と高峰秀子の大石先生の「二十四の瞳」のビデオを頂ました。そこには、私たちを生徒として慈しむ、昔と変わらない小山先生がおられました。

熊谷氏は、千里山会の常連会員であり、皆様もよくご存知と思います。私（萩原）は同級生ながら今の今まで北海道からの転校生だったとは知りませんでした。これで氏が北大に憧れ、進まれたことがわかりました。